

成田
歴史
玉手箱

24回

歴史と伝統文化の
まち・成田。市内に
は、歴史ある文化財
が多数あります。



昭和34年練馬区向山の自宅アトリエで創作に励む勇八（池田早梅氏所蔵、写真は（財）北区文化振興財団田端文士村記念館発行「池田勇八生誕110周年記念彫刻展」より転載）



「雲」昭和3年制作（新田知也氏所蔵、写真は（財）馬事文化財団馬の博物館発行「馬の彫刻家池田勇八」より転載）

通り、大正7年にはアトリエまで建てました。その要因として、御料牧場では優秀な農耕馬や乗馬、競走馬を輸入、生産していたことが考えられます。

勇八の二女池田早梅^{はやめ}さんは、「父は、太平洋戦争が激化するまでの20数年間、年間の3分の1は三里塚や岩手の小岩井農場などで動物の観察や制作に没頭していました。アトリエは赤い屋根がわらで、馬をつないで制作できる広い土間もありました。牧場で動物の解体があるときはそれに立ち合わせてもらい、骨格や筋肉の構造を研究していました。頑固で曲がったことが大嫌い、弱いものには優しく愛情をもって接していました。家庭では子煩悩で、乗馬や山菜採り、タケノコ掘り、栗拾いなど楽しい思い出が尽きません」と語っています。

明治・大正・昭和天皇の御料馬の彫刻をはじめ数多くの作品が三里塚で制作され、数点の作品が市内に現存しています。動物の一瞬の動きを見事にとらえ、優しさにあふれた作品です。勇八が去った後のアトリエは、数人の手に渡り増改築が行われていますが、約60年たった今も取り壊されることなく残っています。



「馬上の南山氏」大正10年制作（三里塚御料牧場記念館所蔵）

馬の彫刻家
池田勇八

近代日本彫刻史上に
異彩を放つた動物彫刻家

三里塚のごく一部の牧場関係者以外にはその名をほとんど知られず、本三里塚（三里塚小学校の北側）にアトリエを構えた一人の彫刻家がありました。名前は池田勇八。特に馬像に優れた作品を残し、彫刻界では「馬の勇八」の異名で知られ、昭和38年76歳で没後、美術通信に恩賜賞候補者としてその名が載った近代彫刻史上に残る動物彫刻家です。

勇八は、明治19年香川県に生まれ、17歳のときに彫刻家を目指し東京美術学校（現在の東京芸術大学）彫刻科選科に入学。同期で後の日本彫刻界の重鎮として活躍した朝倉文夫の「将来、君は動物作家になったらどうだ」の助言が、動物作家への道を歩むきっかけとなったそうです。

貧乏でモデル代が払えず、近くの上野動物園に粘土と制作台を持ち込んで制作に打ち込んでいたとき、動物の生態研究には三里塚御料牧場がよいと教えられたことが縁で、明治44年初めて三里塚を訪れ、その後も足しげく

編集後記

先月末、国立国語研究所よりカタカナ語の言い換え例の発表がありました。本紙では極力なじみの薄いカタカナ語は使わないようにしていますが、ぴったりした日本語が無いときは困りもの。4ページの「ノーマライゼーション」には

注釈を付けたものの、特に多く使用されているのが行政の刊行物と指摘されると反論の余地がありません。用例の中には、本紙表紙の「^{コンテンツ}contents=情報内容」も。言い訳になりますが、本紙では「主な内容」という日本語を併記しています。